

伊能忠敬、西郡測量の旅

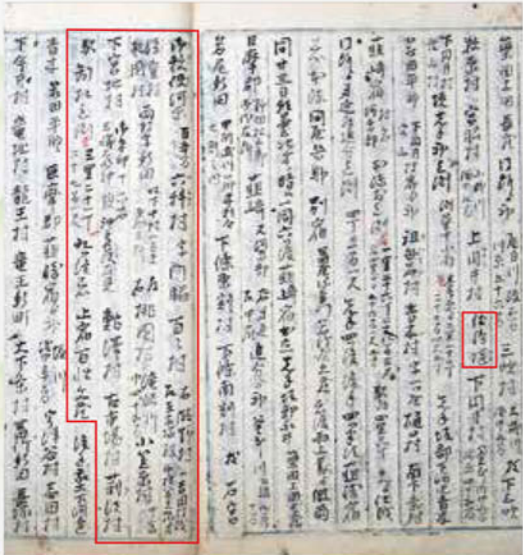
いこのう たただか にしごおり
にしごおりじ かわうちじ

～西郡路・河内路～

ふるさと文化伝承館 「開削 350 年 徳島堰」展
徳島堰改修工事に使われた大野規周測量器具 特別公開中

ふるさと
の 163
の 誇り

博しポート



『測量日記』抜粋。赤線は文化財課が加筆。伊能忠敬記念館蔵

ふるさと文化伝承館で特別公開している測量器具の製作者大野規周(1月号参照)の祖父と父は、日本初の実測地図「大日本沿海輿地全図」(伊能図)を完成させた伊能忠敬に測量器具を提供していました。忠敬が測量し、その死後弟子たちによって地図が完成したのが1821年、今からちょうど200年前です。忠敬率いる測量隊は甲斐国、西郡と呼ばれる市内の街道も測量していました。忠敬が記録した測量日記と伊能図を手に、伊能隊の測量の旅へ出かけてみましょう。

伊能測量隊が西郡を測量したのは、忠敬が測量にかけた17年間計10回の遠征のうちの7回目、第一次九州測量の時です。文化8(1811)年4月21日、九州から江戸へ帰る途中で信州から甲州道中へ入り、翌4月22日は小雨が降る中、台ヶ原宿から葦崎宿までの測量が行われました。その日の日記で注目されるのは、「上戸井村、徳島堰」という記述です。忠敬が徳島堰を認識していたことがわかります。4月23日、葦崎宿から測量隊は二手に分かれ、忠敬の本隊は甲府を経由して「河内路」に入り身延を目指しました。一方先手隊は「西郡路」(註3)を南下するルートをとりました。一行は日の出ごろの六つ時に葦崎宿を出発し、御勒使河原を150間(約272.7m)と測量し、現在の市内に入りました。曇り空から次第に晴れ間が広がる中、六科村、百々村、桃園村と南下し、滝沢川を45間(約81.8m)と測量して小笠原村に入りました。さらに下宮地村の三輪大明神(神部神社)を記録しながら、荊沢宿の北側の入口で道路が直角に曲がる



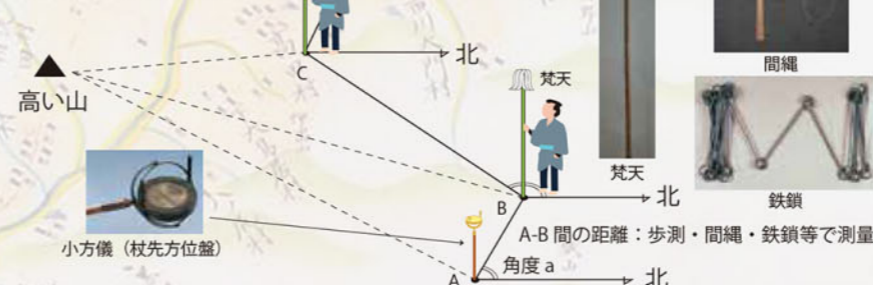
原因(左が北、右が南)。測量した西郡道だけ描かれている。赤矢印が荊沢宿のカネンテ(文化財課加筆)。伊能忠敬記念館蔵

「カネンテ」を正確に測量し、正午ごろの九つ時には荊沢宿に到着しています。この日の移動距離は約14キロ。西郡屈指の豪農であった市川文蔵家が宿泊先となりました。本隊は4月23日に甲府柳町に入り、役所へ届を出したその夜天体観測をしています。これは地図の誤差修正と緯度計測のためでした。当時の地形測量に星の観測は不可欠で、伊能図には天体観測をしたことを示す星印☆が甲府城(「御城」と表記)近くに描かれています。翌4月24日、快晴のもと「河内路」(註4)で身延を目指しました。日記によれば、甲府から荒川を渡って高畑村に入り、西条村や河東中島村、白井阿原を通過して釜無川左岸の浅原村に至り、釜無川を測って先手隊と合流しました。同日、先手隊は荊沢宿を出立し、長沢村を通過して鰍沢駅まで南下した後、北東へ転じて甲府方面へ向かい、東南湖村、西南湖村を北上しながら街道沿いを測量し、浅原村の釜無川で本隊と合流しました。このように、南アルプス市域が伊能測量隊によって測量されたのは、「西郡路」や「河内路」など主要な街道が通る場所だったからにほかなりません。伊能図は文化年間当時の道や集落、寺社、山などさまざまな情報とともに西郡が山と海を結ぶ重要な場所であることを200年後の私たちにも伝えてくれています。

文／写真 文化財課

伊能忠敬測量方法

写真：伊能忠敬記念館蔵



- ① 始める場所 A に小方儀を立て、次に測る B に立てた梵天を見る。小方儀で北から B までの角度 a を測り野帳に記録
 - ② 間縄か鉄鎖で A から B の距離を測量し野帳に記録
 - ③ 遠い距離で、目印となるような高い山などを測量し野帳に記録、各地点で角度を測ることで、誤差を修正できる(交会法)
- 次に B に小方儀を立て、①～③を繰り返す。野帳のデータを基に製図は夜もしくは後日行う

註1 背景の地図は伊能図の複製。赤字・線は文化財課が加筆。南アルプス市蔵。
註2 伊能忠敬像は忠敬が測量出発時参拝した東京都江東区富岡八幡宮の銅像